

コリント人への手紙第一 第12章 22節

「それどころか、からだの中で比較的弱いとみられる器官が、かえってなくてはならないものなのです。」

それどころか、で始まるみことばの意志は、人の思いや考えを覆すものです。人が自己主張をし、比較し劣るものに対して浴びせる視線や言葉に、ところが、と不思議なもの見方どころではない、それどころか、と語りだす。当然と振る舞い、何ら疑うことの知らない人の見立てに真っ向から反するものの捉え方があると語ります。それが真実だと断言します。もはや人の思いや考えがいっさい入り込む余地の無い言葉です。

からだの中で比較的弱いとみられる器官があります。確かに比較すると弱いとみられるところがあるのです。人の目ではそのような見え方がするでしょう。実際弱そうな器官があり、弱いでしょう。しかし、からだを創造されたお方の目ではそのような比較もなければ、弱さも無かったのです。

しかし、と人目での弱さを指摘します。だから、そこそなくてならないものです、と神さまの視線でものを捉えるよう指摘します。それも、かえってなくてはならないものです、と強調してみせます。人目で比較するのではなく、からだを創造された神さまの視線で見つめるのが器官の真価です。

2024年4月30日